

2014年度 文教大学生活科学研究所

## 公開講座記録

開催期間 第1講座・第2講座 2014年 9月27日(土)  
第3講座・第4講座 2014年 10月4日(土)  
会場 文教大学越谷校舎 8号館5階 8501教室

開会の挨拶 研究所所長 神田 信彦  
司会進行まとめ 研修部主任 八藤後 忠夫

### テーマ「今に生きる江戸文化」

— 芸能・武芸・書 —

日本の近代は江戸中後記頃からその萌芽がみられるというのが定説のようです。江戸を含めたそれまでの“豊かな”文化は日本の近代化によってその良さが摘み取られてしまったとも考えられます。近代化以前の江戸の文化は、現在の私たちにも多くのことを教えてくれるような気がします。江戸の暮らし・風俗・慣習・習俗をもう一度ふりかえりながら“非文化”化されてしまった合理的な文明の中にある私たちの“生き方”を今一度別の角度から考えてみませんか？

第1講座では、和楽器・三味線を素材にまず、その音色を感じて頂きそののち楽器本体を解体し三味線が何からできているのか？その素材はどこからやってくるのか？という“音文化”の歴史性に触れます。

第2講座では、宮本武蔵：『五輪書』の解説とともに、兵法の根源に触れます。刀を通じた人間の交わりの文化を展開します。本物の真剣に触れることができるかもしれません。

第3講座では、書道の流派に関してその歴史的な展開を江戸期を節目に解説します。さらに江戸期における“寺子屋”での文字の学習や当時の庶民生活のイメージとその背景について追及します。

第4講座では、人形づくりの歴史とともに江戸期から現在に至る四季折々の行事「五節供（ごせっく）」の持つ文化的な意味について解説します。ひなまつりや端午の節句などの行事の持つ意味と意義やこれからの“町のあり方”にも様々なヒントが浮かび上がってくることでしょう。

## 三味線の腑分け

### — ご禁制品による江戸の音文化 —

新内浄瑠璃演奏家

岡本紋弥

百科事典的な“知識”ではなく、今回は「知恵」中心に —

室町期の後半に現在のかたちになった三味線は、現在も誕生した当時のまま、素材から演奏法までほとんど変わっていない楽器です。

ところが戦後日本人の大多数は、その構造はもちろん、生の音色を耳にしたことがあまりないのかもしれませんが。

三味線という楽器を目の前で解剖（分解）しつつ、その音色を聴いていただきます。受講者全員が直に触れてもらえるよう、楽器を回しましょう。受講者と対面の教室方式ではなく腑分け、すなわち解剖学教室ふうに入講者の間に立って講義を進めます。

#### 1. 楽器の素材、および構造について

棹は、こうき紅木やしたん紫檀。胴は、かりん花欄。ぼち撥や駒は、象牙やべっこう鼈甲、水牛……。これらすべて、台湾以南の熱い地のみに産する素材です。

江戸期の都市部に数百万挺あったとされる三味線は、当初からご禁制品が使われていました。幕府の祖法は「鎖国」では？ さらに21世紀の現代も、輸出入を制限されている素材ばかりです。

腑分けした稽古用の三味線や付属品を、会場に回し観ていただきながら—

さらに皮は猫か犬、絃は生糸。どれも昔から、庶民がわけなく手に入れられる素材ではありませんでした。学術書の中には「沖縄の蛇皮線に用いられるニシキヘビが内地で獲れないことから、猫皮を代用された」などともっともらしい理由付けが書かれていますが、沖縄よりずっと南方の地から取り寄せた他の素材を考えれば、この説は明らかな間違いです。

その上に三味線の場合、楽器そのものから絃までが消耗品です。バイオリンの名器のように、長持ちしません。

江戸という時代の寛容さは「抜け荷」も含め、文化を大いに認めるところにありました。

#### 2. 音色について

では、三味線の音を聴かせましょう。

曲を演奏するのではなく、生音に耳を澄ませて聴いていただきます。

たとえば、サワリという倍音をつくる仕掛けがあります。

また素材の異なる駒に替えるだけで、音色はまったくちがってきます……。

楽器はいつの時代どの民族にあっても、建物との相性から誕生するものです。石の家に合うバイオリンやギター、土の家ではシタールや月琴、木の家に箏や三味線が良い音を響かせます。

ゆえに演奏者は、とことん音色を追及し、輸入してまでも素材にこだわりました。

### 3. “上書き”をしない日本文化

欧米の楽器では、バイオリンもギターも弦をガット（羊の腸）からスチールに換えました。演奏中に切れない、長持ちするなどの理由です。ところが、三味線をはじめとする日本の楽器は、これを「よし」としませんでした。

旧態依然と言えますが、日本人は音楽を現世快樂のアイテムと捉えず、自分の祖先である古人が聴いていた音色を再現しようとする“回帰志向”があるからでしょう。

音楽とは曲を演奏すれば、事足りるものではありません。曲が誕生した時代背景も含め、楽器と演者と「なにか」を共有することが大きなくくりでの芸能文化です。この国が漢字を捨てずに、仮名を併用したのも同じ理由からだったと信じます。

（※上書きとは、パソコン用語で、前の文を消して書き直すこと）

### 4. 古典邦楽“発声と実演”

むずかしい演目ではなく、都々逸（どどいつ）なんぞを一つ聴いていただきましょうか。

## 第2講座 殺人刀から活人剣へ

### 殺人刀から活人剣へ

—万人をいかすはかりごととは何か—

文教大学 教育学部 体育専修 教授

加藤 純一

#### 1. 兵法＝「一人の悪をころして、万人をいかすはかりごと」となる論理構造

柳生宗矩<sup>(注1)</sup>は著書『兵法家伝書』<sup>(注2)</sup>の序において「兵法は人をきるとばかりおもふは、ひがごと也。人をきるにはあらず、悪をころす也。一人の悪をころして、万人をいかすはかりごと也」と述べる。人を截るのではなく悪を截ち、一人を殺めて万人を活かす“はかりごと”とは一体、どのような論理構造をもつのか。

(1) 「止むことを獲ずして之を用ゐる、是天道也」の解釈

「兵は不祥の器なり。天道之を悪む」としつつも、止むを得ずしてこれを用いることを「是天道也」と喝破する宗矩の態度は、『老子』第31章偃武の「恬淡为上、勝而不美」<sup>(注3)</sup>とは異なる兵法観と言える。

(2) 「小さき兵法・大なる兵法」の意味するところ

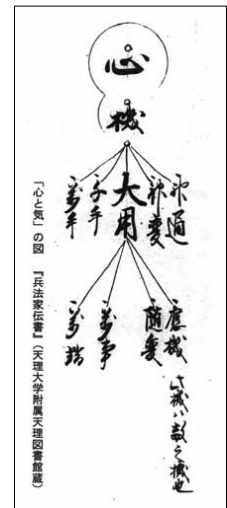
「兵法といはば、人と我と立ちあふて、刀二つにてつかふ兵法は、負くるも一人、勝つも一人のみ也。是はいとちいさき兵法也。勝負ともに、其得失纔か也。一人勝ちて天下かち、一人負けて天下まく、是大なる兵法也」。この論の裏側に見え隠れするものは何か。

(3) 「機を見ること」とは？

「大将の兵法」に必要とされる「大機大用」とは何か。

## 2. 柳生宗矩が抱く「悪」とは何か

以上のように見ること、柳生宗矩が抱く「悪」とは何か、その悪を截ち何を活かそうとしたのかが見えてくるはずである。それが明確になったとき、大監察の職に就いた為政者としての宗矩の姿が浮かび上がる。



### 注

- 1) 陰流、念流、神道流を学んだ上泉伊勢守秀綱は「新」の陰流、新陰流を開流。24人の門弟の中の一人、柳生石舟斎宗厳が継承した流を柳生新陰流と称す。柳生新陰流はその後、尾張柳生と江戸柳生に分かれる。江戸柳生の初代が宗厳の五男である宗矩で、徳川家の兵法師範役の任に就く。
- 2) 宗矩は新陰流の兵法をまとめ柳生家にそれを伝えるための書を認めた。それが『兵法家伝書』である。しかし、この書は柳生家だけではなく、実際には小城鍋島家、鹿島鍋島家、細川家にも伝えられ、現在、本家を合わせて4系統が確認されている。

## 江戸期の書文化

### — 流派・書之美・江戸の書の粋 —

文教大学 文学部 日本語日本文学科 准教授

豊口和士

#### 1 いわゆる流派について

書道の世界では、現在もなお流派や会派が歴然と存在します。その善し悪しをここで言及することはしませんが、流派・会派があることによる弊害の一端と思われる事件が、昨年世間を騒がせました。その詳細については講座でお話してきたらと思います。いずれにしましても、我が国における長い書道の歴史がその流派によって支えられてきたというのもまた事実といえます。

書道の流派の歴史は、古くは平安時代中期以降、遣唐使が廃止されて中国からの影響が徐々に減少して和様化が進む中で生まれてきます。中国からの理論流入に代わり我が国独自の「和様書道」に即した書道理論がここから継承され始めていきます。流派の最初が藤原行成の流れを汲む「世尊寺流」です。その後、「法性寺流」「持明院流」「青蓮院流」などの流派が生まれます。いわゆる「流儀書道」はこうして始まりました。流儀書道の祖となる世尊寺流は世尊寺家嫡男によって代々受け継がれ、世尊寺家が宮中の書き役を担い、鎌倉時代には最も権威ある流派となりました。

一方、南北朝時代には、世尊寺流の流れを汲む尊円親王により「青蓮院流」が創始されます。尊円親王による『入木抄』は、執筆法、学習法、用筆法、結構法、用具論などの理論を綴った学習書、今日でいう教科書のようなものでした。一方の世尊寺流の相伝書としては『夜鶴庭訓抄』が挙げられます。

この時代、尊円親王の他にも能書な天皇が多く、伏見天皇（「伏見流」）、後伏見天皇、後宇多天皇、後醍醐天皇、花園天皇などが挙げられます。鎌倉時代、政情不安定な南北朝、そして室町時代の書道ならびにその流派は宮廷において守られたといえるでしょう。

室町～安土桃山時代は、北山文化・東山文化として知られるように、能、茶、花などが大いに花開いた時代ではありますが、書については停滞期といってよいでしょう。それはあたかもそれぞれの流派が流派の殻から抜け出せずに閉じこもってしまったような状態であったといえます。今日の書道界も後世から見ればまた同様に映るのかもしれませんが。

江戸時代に入ると、流儀書道は大きく動き出します。世尊寺流の流れを汲む青蓮院流と持明院流はともに勢力を保ってきましたが、江戸幕府により青蓮院流は「御家流」として尊重されるようになり、幕府の公文書をはじめ、寺子屋での手習いの手本にもなりました。しかし、御家流が一斉を風靡する一方で、流儀書道は混乱し始めます。流派が多岐に分散し、その多くがもはや流派と呼ぶに値しない低俗なものへと変貌していきます。これは、社会生活の安定、文化・教養の庶民への広がり、識字率の向上などの社会・生活の変化によりもたらされた必然的な流れだった

のかもしれませんが。

流派書道が低迷・低俗化する一方で、書道史上では、漢学・儒学の隆盛とあいまって大きな変化が生じ始めます。中国における明末清初の混乱を避ける形で黄檗僧おうぼくが多数渡来したことにより、宋・明の書風が一気に移入され、中国風の書風、いわゆる「唐様書道」が確立されることとなります。平安時代の遣唐使廃止以来、脈々と継承されてきた和様書道は、江戸時代にいたって、中国の書論（書道理論）に裏打ちされた唐様書道へと大きく進路変更することになりました。また、中国書論を背景とすることにより、ある意味で学術的な視点からの書作がなされるようになり、同時に、中国書論を引用しながら、そして日本の風土・慣習等を踏まえつつ、自身の芸術観や教育観を雄弁に語る日本の書論が発表され始めます。これは、平安時代以来の教科書的ともいえる書論とは異なり、芸術論、書道学といったテイストのものといえます。書の作品も、儒学の奨励により、儒学者による書が江戸時代、特に江戸初期を代表する書になっています。ただし、それはあくまでも日常的な書記体ともいうべきものであり、書道の歴史に裏打ちされたものではなく、また芸術の域に達するものではありませんでした。代表的な儒者としては、林羅山はやしらざん、石川丈山いしかわじょうざんらの他に、唐様の北島雪山きたじませつざん、細井広沢ほそいこうたく、新井白石あらいはくせき、荻生徂徠おぎゆうそらい、伊藤仁斎いとうじんさいなどが挙げられます。また、次章で触れますが、絵画を含めた江戸時代独自の流派も生まれました。

こうした江戸時代の動きを経て、やがて明治時代になると、中国から志那公使何如璋りくちようふうとして地理学者・金石学者である楊守敬ようしゅけいが来日したことを契機に、中国古代からの碑法帖に学ぶ六朝風書道が盛んとなり、それまでの流派書道は一掃されます。まさに今日の書道界へと展開する近・現代の書道史の新たな原型が作られ始めます。楊守敬の教えを受けた人として巖谷一六いわやいちろく、書家宣言で知られる日下部鳴鶴くさかべめいかく、松田雪柯まつだせつからが挙げられます。その他、明治・大正時代の六朝風で高名な書人としては、中国に渡り楊守敬の師潘存はんそんに学び『梧竹堂書話』でも知られる中林梧竹なかなばやしごちく、比田井天来ひだいてんらい、北方心泉きたかたしんせん、西川春洞にしかわしゆんどう、川谷尚亭かわたにしようていなどの他、副島種臣そえじまたねおみ（蒼海）、西郷隆盛せうかい（南州）、犬養毅いぬかいつよし（木堂）といった明治元勳志士・政治家の他、学者、歌人などが挙げられ、いわゆる教養と学識を備えた人たちによって文化面での書道が担われていたわけです。また、公的な展覧会がスタートすることにより（明治10年、第1回内国勸業博覧会など）、日下部鳴鶴の書家宣言に始まるいわゆる「書家」が会派を創立し始めることになり、その系譜が今日の書道界・書壇の会派を形成することになる。

## 2 江戸期の書の美

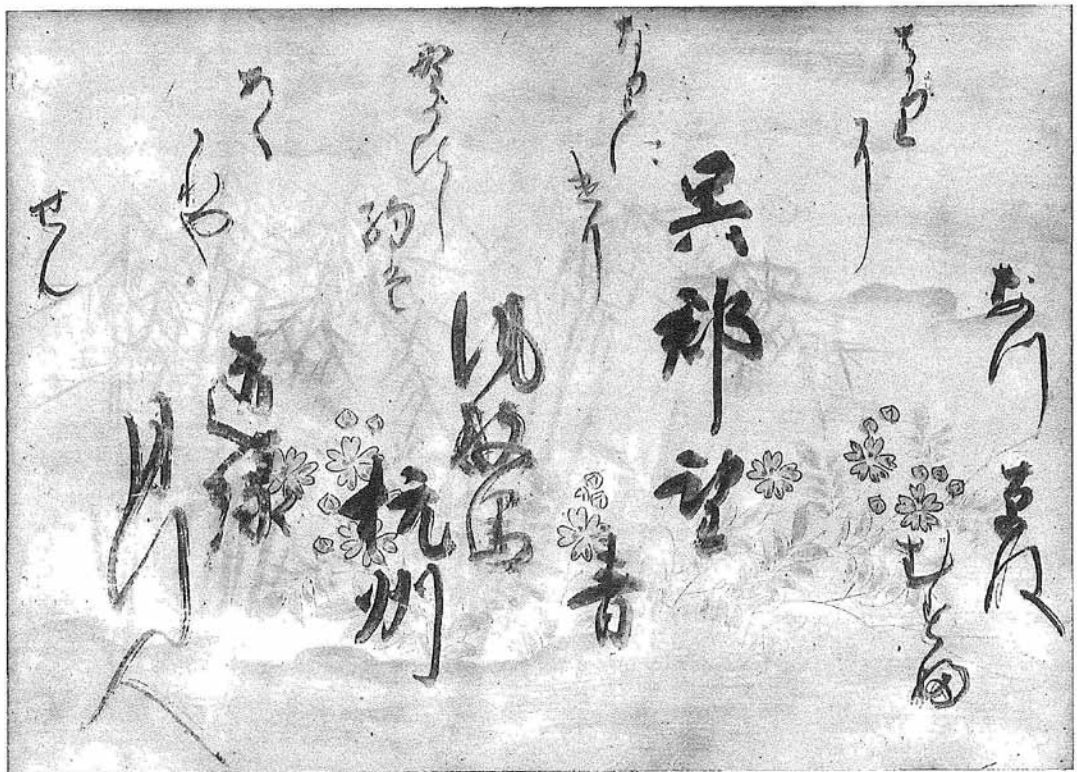
平安時代から継承されてきた流儀書道の流れが江戸時代を最期に衰退したことはさておき、江戸時代の書の傾向として、黄檗僧来日に伴う唐様書道の影響と隆盛、中国書論に裏打ちされた理論的な書道観およびそれに基づく書作、そして儒学者による書が江戸を代表していることを挙げました。流儀書道という視点からは、確かに江戸時代にその流れは衰退したといえます。それはなぜでしょうか。その一つの答えが、真の芸術と呼ばれうる作家、作品が生まれたからだと考えることができます。

そもそも流派とは、祖となる能書家が発明あるいは生み出した優れた書風を師匠から門弟へと伝授することで一家の芸能として継承していくためのシステムといえます。そして、そこで継承される書風や書法は社会的な風俗・習慣に基づく実用的なものである必要があります。それ故、普遍的で学習しやすく実用的な流派は長続きするともいえますが、あらためて「芸術」という視

点から眺めてみた場合、必ずしもそれが価値あるものであるとは限らないわけです。

一方、ある意味で天才的な発想と技能を持った人物によって生み出された書風・書法についてはどうでしょうか。仮にそれが一つの流派を築いたとしても、長続きはしないことは明かす。なぜなら個人的・天才的な能力は必ずしも伝承・継承できるとは限らないからです。いわゆる「寛永の三筆」と称される本阿弥光悦ほんあみこうえつ、近衛信尹このえのぶただ、松花堂昭乗しょうかどうしょうじょうのうち、光悦こうえつりゅう（光悦流）、信尹このえりゅう（近衛流・三藐院流）はまさにこれにあたる应该说よいでしょう。残念ながら、昭乗の書は普遍的・実用的な領域に留まるものといえるでしょう。

講座では、本阿弥光悦、近衛信尹の作品を中心に、江戸に花開いた「芸術」としての書について紹介したいと思います。ちなみに「芸術」という語は、明治以降に欧米からもたらされた概念に対してはじめて我が国で認識されることになる概念・用語であり、明治時代より前にも「美」は確かに認識されていた一方で、それはあくまでも「実用の中の美」「実用に即した美」であった应该说よいでしょう。その点でも、光悦、信尹の二人は、いまだ「芸術」の概念すらない江戸時代において、今日の視点からも確かに「芸術」と呼ぶべき書の作品を生み出したという点は、まさに驚くべきことであり、文字通り「天才」であったのでしょう。おそらくその背景には、俵屋宗達たわらやそうたつ、尾形光琳おがたこうりんに代表される江戸期の絵画世界の成熟があったであろうことも付け加えておきます。



近衛信尹 新撰朗詠集

### 3 寺子屋における文字教育

江戸時代には、全国に「寺子屋」や「私塾」ができました。安政期に入ってそれらの数は急激に増加することになり、地域内で学習機会を自給できるようにもなってきます。寺子屋では、今日でいうところの児童に対して「読み書き算盤<sup>そろばん</sup>」、私塾では、青年（今日でいう生徒）に対して「漢学や国学、その他の専門学科」を教えていました。その点では、それぞれを「手習塾」「学問塾」と捉えることもできましょう。本講座で取り上げるのは、このうち、寺子屋における「手習い」、つまり江戸時代における庶民の文字教育・文字学習の実態ということになります。

細かなことは講座にてお話しするとして、政情・社会体制・生活ともに安定していた江戸時代において、今日にも繋がる「学び」の形が江戸時代に作られはじめ、あくまでも分限（身のほど）に応じてではありますが、地域によっては農村に至るまで教養・文化が文字の教育を通じて浸透していったことは興味深いことです。文字が学ばれることにより、いわゆる「識字率」が向上したという現象面での変化にとどまらず、広く社会全体で文字が教育され、文字の運用能力を身につけた庶民が多くなるということは、社会全体の教養・文化のレベルが向上することでもあります。文字を学ぶということは、日常の記録の用はもちろんのこと、芸能としての謡を学んだり、仕事をする上での基礎能力を身につけたり、道徳そのものを身につけることでもあったわけです。その反面、文字を学ぶことが、生活面での豊かさと裏腹に確かに存在していた封建的社会制度を支える基盤ともなっていたとも考えられますが、本講座では寺子屋教育の明るい側面について取り上げたいと思います。

「あしたから手習だァと叩いてる」(柳多留 45 篇 17 丁)

江戸の名物「伊勢屋稲荷に犬の糞、火事に喧嘩に中っ腹」に挙げられる稲荷大明神。一つの町に二・三社あるほどたくさん社の社があり、初午（二月最初の午の日）に寺子屋に入学することが当時の習慣となっており（寺入り）、上の川柳は、初午の前夜祭で次の日に寺入りする子どもが稲荷社で太鼓を叩いてはしゃいでいる様子を描いた川柳です。学ぶことへの素直な喜びが伝わってきませんか。

### 4 江戸の書の「粋」

庶民に文字が普及・浸透してきたことを背景に、当時の中心都市である江戸では町中に様々な文字の工夫が見られるようになりました。

そもそも江戸時代には、いわゆるパロディの文化があり、「もじり」「地口」「見立<sup>じぐち みたて</sup>」がその例といえます。それらは生活・文化の中で今日にまで継承され、主に広告の世界で同様の工夫が多く見られます。詳細については講座でお話しするとして、江戸の文字に見られる工夫は、単なる文字装飾をいったものではなく、また江戸っ子的な駄洒落のようなものでもなく、そこにはいわゆる「粋」な工夫が多く見られ、今日の広告世界のテクニクにも通じる例も少なくありません。

また、いわゆる江戸文字と呼ばれる装飾文字として、勘亭流（歌舞伎の看板）、寄席文字、髭髭文字、籠文字、相撲文字、提灯文字、角文字なども庶民の生活・文化の中で考案され、今なお私たちの暮らしの中に根づいています。文字やことばの他に、小紋などに代表される「模様」



「デザイン」についても多くの図案が考案されたことはご存じのことと思います。講座では、時間の許す限りでのご紹介になりますが、「江戸の粋」を感じてみてほしいと思います。



安藤広重 東海道五十三次風景続画「大津」



安藤広重 名所江戸百景「びくにはし雪中」

## 日本の伝統文化 五節供（ごせつく）

— 世界無形文化遺産登録に挑戦 —

人形の東玉社長

戸塚 隆

宮中の行事に由来を持つ『五節供』は美しい日本の伝統文化です。

じんじつ じょうし たんご たなばた ちょうよう  
人日、上巳、端午、七夕、重陽

一月を除き、奇数の同じ数字の月日が並ぶ「五節供」は古代中国における一年の五つの節目に祝祭を行う風習がルーツで、奈良時代に宮中に伝わり、特別な食物や料理を神仏に供えることから「節供」と称されるようになりました。さまざまな宮中の節供行事が江戸幕府により五つに絞られ「五節供」となり、やがて一般庶民にも季節の節目に無病息災や子孫繁栄、豊作などの願い、厄払いをする行事として広まるとともに、「節供」が「節句」と記されるようになりました。

- 1月7日 人日じんじつの節供（別名：七草の節供）
  - 3月3日 上巳じょうしの節供（別名：桃の節供）
  - 5月5日 端午たんごの節供（別名：菖蒲しょうぶの節供）
  - 7月7日 七夕たなばたの節供
  - 9月9日 重陽ちょうようの節供（別名：菊の節供）
- 以上「五節供」と呼ばれ定着しました。

### 人日じんじつの節供（別名：七草の節供）

正月の終わりが六日で、新年の始めが七日ということから、この日は一年の始めの節せつじつ日（季節の変わり目の日）とされていました。

昔、中国ではこの日に七種菜ななしゅなの汁を食して無病息災を祈願しました。これが日本古来の「正月七日のお祝い・七草粥ななくさがゆ」に通じ、人日の節供として定着しました。

一月六日から七日にかけ、各戸で七草をまな板の上にならべ、すりこぎ、包丁などでたたき、はやしことば囃子詞をあわせ一年の無病息災を祈りました。

♪♪七草なずな唐土の鳥が、日本の国に渡らぬうちに

七草なずなの菜をたたけ トントントン スットントントン♪♪

七草は「せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ」です。七は葉菜に通じることから、多くの若菜を粥に入れて楽しんだ庶民の生活の知恵でした。

## 上巳の節句（別名：桃の節句）

上巳とは三月はじめの巳の日をいいます。

この日平安貴族は草や紙で人形をつくり、罪、穢れを人形に託し川や海に流しました。これを「流し雛」といいます。この時、自分の病気や悪いところも人形といっしょに流してしまうと信じられていたからです。

桃の花が咲く頃に行われ、桃花酒を飲み、健康を祝いました。このことから「桃の節供」とも呼ばれています。

桃の節供が三月三日に行われるようになったのは、奇数の重なる日は縁起が良いとする思想が、中国から伝来してからのようです。

## 端午の節句（別名：菖蒲の節句）

端午の節供は、昔の中国で旧暦の五月は疫病など災厄が多かったことから物忌みの月とし、初午の日（五月初めの午の日）に菖蒲酒を飲んだり蓬で作った人形を門戸にかけてお払いしたのが起源といわれています。

これが日本に伝わった奈良時代の頃、宮中に厄よけの武道行事があり「菖蒲」が「尚武」（武を尊ぶ）に通じることから、この双方が結びついて端午の節供となりました。

江戸時代になると武家社会では武者人形を飾って男児の成長を祝うなど、五月五日の節供の行事として発展し今日に受け継がれてきました。昭和23年には五月五日は「子供の日」として祝日に定められました。

## 七夕の節句

七夕の節供は、日本古来の「棚機津女信仰」（たなばたつめしんこう）と中国の「乞巧奠」（きっこうでん…機牛織り姫伝説）が結びついたもので、江戸時代には五色の短冊に詩や願い事を書き、竹に飾るようになりました。

また、七夕は神に捧げる収穫祭でもあり、小麦や野菜は欠かせない供え物でした。地方によっては、竹飾りの他にわらや紙などで人形・牛・馬などをつくり、軒下や家の入り口、外の木枝に飾り、人形に厄を託して吹き飛ばしてもらおう祈りの行事でした。

## 重陽の節句（別名：菊の節句）

重陽の節供は「菊の節供」とも呼ばれ、平安時代より不老長寿を願い、菊にまつわる行事が行われていました。

この日は、秋の収穫祭でもあり人々は御神酒に菊の花を添え、稲、栗などをお供えして、神に感謝をし無病息災を祈りました。

古代中国では、菊の花を浮かせた酒を飲むと菊の芳香と花の気品の高さによって邪気を祓い、寿命が延びると考えられてきました。この習俗が日本に入り旧暦九月九日に初寒を退け、長寿平安を願うという「重陽の宴」が生まれ、宮中や武家社会で盛んに行われたということです。

## 結び

人日、上巳、重陽の節供などという言葉は、あまり耳慣れない言葉ですがそれぞれの行事を知りますと、そこには日本人の美意識や心の豊かさなどを感じることができます。

国際化社会となった今日、私たちは日本の美しい伝統行事を通し、季節感や心の豊かさを次なる世代に受け渡し、新しい価値観の育成に役立てたいものです。